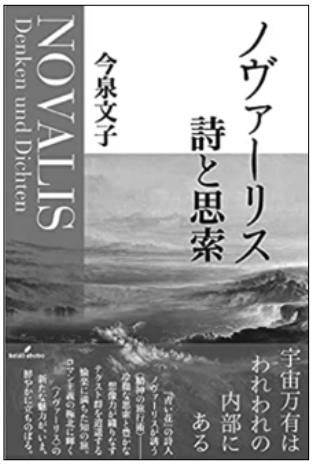
ノヴァーリス―詩と思索

今泉文子　著



加藤　耀子（評）

すごいご本をとうとうお出しになりましたね、としかいえない。著者はノヴァーリス研究に、18世紀の終りに短い時を送ったこの詩人の人生よりも長い時間をかけてきた。批判校訂版の膨大なページにも驚くが、この 200 年の間に書かれた評論、著者が徹底して読み込んでいる著名な名前の多様さにも驚く。ロマン派の詩人たちとその研究者から、ヘシオドス、プロチノス、ヤーコブ・ベーメを経てフィヒテやシェリングからフーコーまで。そして気づく、ベンヤミンのテキストでさえもう100 年近く経ていると。本書は一人の詩人の足跡の研究に加えて、その過ぎた時間の検証でもある。

著者はクリングゾールのメルヒェンという最も高名なテキストをたぐりながら、天上界、地上界、地下界を巡るその不思議な登場人物たちによって、ノヴァーリスの思索の道筋を一行一行に刻み込んでゆく精密な作業を続ける。天上界「だが輝きだすのは星だけではない、さまざまな色彩にきらめく光のページェントが演出される」。フライベルク鉱山学校で学んだ「この理系の青年は、演劇性の概念を見事に広げる――」天空も顕微鏡下も一つの舞台、「かれにとって演劇とは、観察と実験、現実と家庭、観念と表彰のあわいに湧き上がる（観者参入の見世物）」。「二層目は地上界で、一つの家族を構成する。」父親（感覚）と母親（心）と、その息子エロス（愛）、乳母ジンニスタン（空想／想像力）とその娘ファーベル（詩）、書記（啓蒙悟性）、各々の体現するアレゴリーをあげつつ、著者は多様なかれらの変身を描くが、それはまた詩人の思索の変容のあと付けでもある。詩人は「地下世界と採鉱の仕事を、人間の心とそれを探る営為とに結び付ける。」地下は「埋もれた記憶」の住まうところ「歴史に関わるところ」、眞の歴史の語り手とは「当然、詩人でなければならない」とつながる。そして当然、著者はファーベル（詩）と同様、この三層の世界を自由に行き来する。そして日本語による豊かな〈読み〉を与えてくれる。

「詩作とはノヴァーリスにおいて、人間に本来的な創造的営為であり」「文字記号による詩が〈歌〉になったとき精神が自由になる」「思索は詩作」「詩作は思索」あるいは「哲学は詩（ポエジー）となる」「思考は畢竟、感情の見る夢」「読み手はなにものかにうながされて〈読み〉の旅に出立する」「ノヴァーリスは言う―知り得るものは「私」「自己自身」なのだ、と」。

（「」内はすべて本書よりの引用）

『ノヴァーリス―詩と思索』（2021 年）
今泉文子著
勁草書房　本体価格 3700 円

人はなぜ神話〈ミュトス〉を語るのか―拡大する世界と〈地〉の物語

植朗子／清川祥恵／南郷晃子編

鈴村　裕輔（評）

本来は単なる「物語」を意味する言葉であった「ミュトス」が、何故日本語では「神話」となったのか。西洋による他の世界との邂逅と、他の世界による西洋の発見を通して相互に影響し合うという文明と文化の変化のあり方は「神話」にも当てはまるなら、現代において、「神話」はいかなる意味を持つか。あるいはグローバル化が高度に進展する現在、自らの依拠するローカルな場所、あるいは「地」の価値はどのように評価されるか。

このような問題意識は本書に一貫する基層であるとともに、本書に収められた 16 編の論考の外縁をなす考えでもある。

「ヨーロッパ」、「日本」、そして「新たな世界」を対象とし、神話学だけでなく、宗教学、文学、思想史、文化人類学など隣接諸科学の研究者たちが析出するのは、一面においてヨーロッパにおいて「ミュトス」が絶えず求め続けられた構造であり、他面ではそのような「ミュトス」を「神話」とせざるを得なかったそれ以外の世界の姿である。それとともに、中村哲の『宇宙神話と君主権力の起源』（2001 年）が克明に描き出したように、宇宙創成の物語は絶えず権力と結びつくものであり、権力の正当化のためにも神話は大きな役割を果たしてきた。

ここで重要なのは「ミュトス」であれ「神話」であれ、これらは世界を語るための手段であり、その語りの中で新しい世界が作り上げられているのである。そして、本書に参加した 16 人の研究者は、それぞれの視点から「神話」が作り上げる世界の姿がどのようなものであり、その創造の過程において「神話」を語る集団の内と外との間にいかなる関係があるかを入念に検討する。

その意味で、いずれも興味深い論考の中で最も印象的なのは、編者の一人である清川祥恵の論文「夜を生きるパンサーの子ら」である。本論は 2018 年の映画『ブラックパンサー』を手掛かりに、いかにして全く新しい世界の物語が作り出されるかを説くことで、「神話」が決して過去のものではなく、むしろ現在のわれわれにとっても「新しい世界」を建設し、そして確かに存在するものとして不可欠であることを示している。

「神話」を考える際に重要なイスラム教以前の中近東やインドなどが主題的に取り扱われていない点は、読者に新たな論文集で詳述されることを期待させる。

しかし、神戸神話・神話学研究会の企画の一つとして編纂された本書は、「神話」のもつ動的な姿を鮮やかに描き出すだけでなく、われわれを取り巻く政治的、社会的、あるいは文化的な状況がどのように変化しても、これからも「神話」が人間の営みにとって重要な役割を果たし続けることを教える、意義深い 1 冊なのである。

『人はなぜ神話〈ミュトス〉を語るのか―拡大する世界と〈地〉の物語』（2022 年）
植朗子／清川祥恵／南郷晃子編
文学通信　本体価格 2800 円

イタリア紀行（上・下）

J・W・ゲーテ著　鈴木芳子訳

浅岡　泰子（評）

ヴァイマール宮廷のエリート官僚だったゲーテは、ふくれあがる公務に忙殺されて、自作の執筆もままならぬ日々を過ごしていた。このまま自分をすりへらす環境に身を置くべきか？　自分の「本当の仕事」は、どこにあるのか？

37 歳のゲーテは、ついに「公務をほうりだし」、主君に目的地も告げず長年の夢であった「イタリア旅行」を決行する（1786）。

『イタリア紀行』(J・W・v・Goethe: Italienische Reise I,II. Zweiter Römischer Aufenthalt)は、以後２年にわたるゲーテの「イタリア全土の旅の書簡・日記・報告集」である。本作品の全訳はすでに２作あり（相良守峯＜1960＞、高木久雄＜1979＞=いずれも初版発行年）、2021 年発行の鈴木芳子訳『イタリア紀行』は、3 番目の訳業にあたる。今この３種の「『イタリア紀行』訳」を読み比べると、相良・高木訳には日本における「ゲーテ受容・ドイツ文学受容の道程」が、感銘を持って感じられる。さらなる新翻訳に求められるは、先行翻訳を滋養とした「現代における原作の新解釈」であろう。時代の変化につれて、「原作研究」はさらに進化し、日本語そのものも、変化してゆくからである。

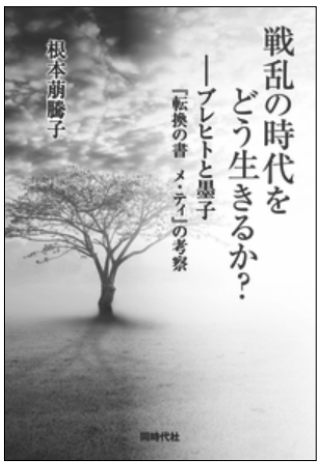
鈴木芳子の『イタリア紀行』は、まず日本語として入りやすさ、という点で優れている。「文庫本」という体裁に加え、一段組で活字も大きい。「脚注」になっているので、見やすい。短文を多用した平易・軽快な訳文は、ついに憧れのイタリアに入ってゆくゲーテの踊るような心をよく伝えている。「イェズス会は、賢いなぁ」（上　12 頁）、「オールシーズン、いたるところで食べ物に取り囲まれて…」（上　662 頁)などの口調には、現代日本語のパンチがよく効いている。ゲーテは異国の鉱物に気を取られ、建築・絵画に圧倒され、イタリアの民衆の姿に興味津々である。訳文は詠嘆に流れず即物的かつ滑らかな日本語で、見事というべきだろう。鈴木訳には「イタリア滞在中のゲーテの足跡の（諸都市内の足跡も含めて）日付入り地図」も、新掲載されている。ゲーテはイタリアで絵の勉強も深め、イタリア旅行中の水彩スケッチ 800 枚、デッサン 3000 点が残されているが、鈴木訳がその数点を紹介しているのも新しい。北国ドイツの狭苦しい宮廷づかえの身から脱出したゲーテは、イタリアの眩しい光の中で、「物事をあるがままに見る修行」をつみ、「自然の深淵を見るものは、芸術の深淵を見る」との結論を得る。イタリア旅行を通して、「自らを内奥から作り変える再生作業」を体験した彼は、「わが天命は詩文学にあり」との決意を抱いて帰国する。

鈴木訳が「新訳の届け先」に想定したのは、おそらくは人生の途上にあってゲーテと同じ問：自分のなすべき仕事とは何か？　自分とは？　を抱くひとたちではないだろうか。それが前 2 翻訳作品とはまた違った目線でなされた、鈴木訳『イタリア紀行』の現代性であろう。

『イタリア紀行（上・下)』(2021 年)
J・W・ゲーテ著　鈴木芳子訳
光文社　本体価格 1620 円（上)、1320 円（下）

戦乱の時代をどう生きるか？―ブレヒトと墨子 『転換の書 メ・ティ』の考察

根本萠騰子著



増本　浩子（評）

学生時代に指導教授から訳してみないかと渡されたのがルート・ベルラウの回想記『ブレヒトのライ・トゥ』で、この本を通じて『転換の書 メ・ティ』（以下、『メ・ティ』と略記）のことを知った。『メ・ティ』で「ライ・トゥ」と呼ばれているのは私です、という意味の題名である。ブレヒトが苦手だった私は作品をまともに読んでおらず、試訳を見た教授に「ブレヒトのことを何も知らないねぇ」と呆れられた。それ以来『メ・ティ』をなんとなく敬遠していたので、本書を読んでようやく肩の荷を下ろした（？）気分である。本書には『メ・ティ』のもとになった『墨子』の独訳本のこと、『メ・ティ』が書かれた亡命時代と東ドイツ時代のこと、理解の手がかりとなる他の作品のこと、そして弁証法や暴力や愛についてのブレヒトの思想がわかりやすくまとめられている。『男は男だ』のような初期作品から晩年の『トゥランドット』まで幅広い作品が扱われているので、ブレヒトの入門書として読むこともできる。

とりわけ興味深いのは、フォルケ訳の『墨子』に関する記述である。ブレヒトはこの本をドイツから持ち出し、亡命先のデンマークで哲学者カール・コルシュとともに読んだ。著者はベルリンのアルヒーフに残るその本を丁寧に調査し、誰がどこに下線を引いているか、どんな書き込みをしているかを逐一記録したのだ。本書で下線のある箇所やコメントが紹介されていると、ブレヒトとコルシュの知的共同作業を目の当たりにしているようでわくわくする。

少し残念に思われるのは、ブレヒトが社会主義ソ連のような国家体制を理想的とみなしていたことが指摘されるにもかかわらず、コルシュに負けないほど活発に交流していたソ連の芸術家への言及がないことである。異化効果というシクロフスキーの概念をブレヒトに紹介したのは作家トレチャコフだと言われている。モスクワでブレヒトに京劇を見せたのもトレチャコフである。映画監督エイゼンシュテインと演出家メイエルホリドも一緒だった。本書でも触れられているベンヤミンの『生産者としての作家』も、トレチャコフの活動に刺激を受けて書かれた。エイゼンシュテインは日本語を学び、トレチャコフは中国通だったから、ブレヒトが東洋に関心を持つようになったのも彼らの影響が大きかっただろうし、『メ・ティ』に中国名で登場するレーニンやスターリンに関する情報もかなりの部分は彼らから得ていたと思われるが、どうだろうか。

それはともかく、ロシアのウクライナ侵攻によって世界情勢が大きく変わった今、私たちに改めて「戦乱の時代」の生き方について考えさせてくれる一冊である。

『戦乱の時代をどう生きるか？―ブレヒトと墨子 『転換の書 メ・ティ』の考察』（2021 年）
根本萠騰子著
同時代社　本体価格 2200 円

移民のヨーロッパ史―ドイツ・オーストリア・スイス

クラウス・J・バーデ編　増谷英樹／穐山洋子／東風谷太一監訳

前田直子／藤井欣子／鈴木珠美訳

畠中　茉莉子（評）

本書の編者クラウス・J・バーデはヨーロッパにおける移民の人びとが辿った歴史を包括的にまとめるという大胆な企図をもち、この分野の研究を推進し続けている。そして本書は、彼が主幹となって編纂した辞典『ヨーロッパの移民：17 世紀から現代まで』の抄訳に、それぞれのテーマに即した訳者解説が付されたものである。2015 年以降のいわゆる「欧州移民（難民）危機」以来、近年では EU 加盟諸国をはじめとするヨーロッパ、特に東欧と呼ばれる地域が中東そしてアフリカ諸国からの多くの移民・難民と呼ばれる人びとをめぐって難しい対応を迫られていることは周知のこととなった。すなわち様々な形で、それぞれの事情からこの地域を「移動する人びと」をめぐる諸問題である。

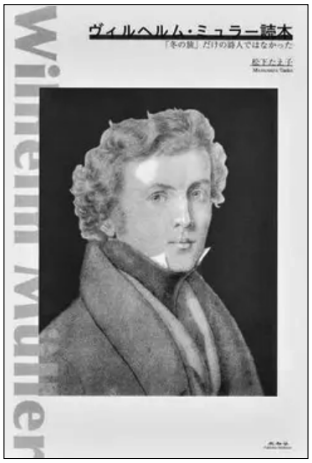
しかし、ヨーロッパを「移動する人びと」をめぐる問題の射程はこうした現代の出来事に留まるものではない。それが本書『移民のヨーロッパ史』を貫く視点である。両世界大戦中に生じた大量の避難民、捕虜、追放者、そして亡命者の存在。さらに歴史を遡れば 17 世紀初めの「三十年戦争」を契機とする多くの人びとの追放ないし呼び寄せ、ドイツ人の東方進出、ハンガリー人、スラブ人の西方への浸透、フランス革命によって引き起こされる人びとの大移動、19 世紀のユダヤ人の通過ないしは定住といったように、長きにわたってヨーロッパは大量の人びとの移動と、それに伴う様々な社会的問題に直面してきた。そしてその中心地となったのが、数世紀にわたって国境が流動的に変化してきたドイツ、ヨーロッパの中央に位置し、東西、南北の商業ルートの結節点となってきたオーストリア、そしてアルプスの南北を横断する重要な経路上に位置し、移住者の受け入れという問題に大国とは異なる独自の形で直面してきたスイスだったのである。

もちろん、各国、各地域における人びとの移動の背後には当時の政治的、経済的、さらには宗教的事情が複雑に絡んでいる。その実態を明らかにするため、今日、多数の研究者たちが膨大な資料の発掘を進めている。むろん各時代、各地域によりそれぞれ様々に異なる形をとるそれぞれの「移動」をいかに呼称するかという問題は依然として難しい課題ではあるものの、本書は現時点での研究成果を極めて総括的な形で提示してくれている。現代のいわゆる移民・難民問題に関心を持つ読者にとってはもちろん、この地に広く関心をもつ私たちにとって、本書はこの地域における様々な「移動する人びと」についての知見を深めるための、大きな一助になってくれるに違いない。

『移民のヨーロッパ史―ドイツ・オーストリア・スイス』（2021 年）
クラウス・J・バーデ編　増谷英樹／穐山洋子／東風谷太一監訳　前田直子／藤井欣子／鈴木珠美訳
東京外国語大学出版会　本体価格 3200 円
Klaus J. Bade et al.: Enzyklopädie Migration in Europa - Vom 17. Jahrhundert bis zur Gegenwart (2007)

ヴィルヘルム・ミュラー読本―「冬の旅」だけの詩人ではなかった

松下たえ子著



渡辺　美奈子（評）

「菩提樹」、「居酒屋『緑の輪』で」、「さすらい」等、今日も愛唱される民謡調歌曲を詩作したヴィルヘルム・ミュラーは、学生時代に解放戦争に志願して前線で戦い、復古期の困難な時代に多数の作品を生み出した詩人である。とりわけギリシア独立戦争に関する詩作により、彼は生前より国内外で評価を得ていた。没後は、シューベルトの二大連作歌曲以外あまり注目されることがなかったが、生誕 200 年に当たる 1994 年を機に研究が活発化し、わが国でも関連する著作物が次々に上梓された。だがその多くは、『冬の旅』など特定の詩作を中心としたものだった。

当書は、著者の長年にわたるドイツ文学研究を基に、ミュラーの生涯、作品、受容史が総括された書である。最初の章では、ミュラーの生涯が簡潔にまとめられており、「旅するはミュラーの歓び」と題された次の章では、「イタリアの旅」、「ロマン派の旅」など 7 つの節で作品と詩人の体験が語られている。6 つめの節「冬の旅」で著者は、次のようにミュラーを文学史の中で位置づけ、『冬の旅』が我々に共感と感銘を与える理由に言及した。「ミュラーのみならずロマン主義や後期ロマン派に属するとされる作家たちは、既に次世代の作風をその作品のうちに持っている」。『冬の旅』は同時代の詩人に受け入れられなかったが、シューベルトが「大いなる共感と感銘」を持って、その「新しさ」を音楽で「補完」した。「補完されたものが今に通ずるものであることを証明するように、後の世の多くの人が『冬の旅』を引き合いに出している」のである。（「　」内 172－173 頁より引用）

終章では受容史がまとめられている。1970 年代までミュラー研究がほとんどアメリカにおいてなされたことについての詳細な記述は、当書の読みどころと言えるだろう。わが国における受容で本文が締めくくられた後には、主な詩作品の訳詩が掲載されている。

ミュラーの息子で著名な宗教学者・東洋学者のマックスは、ライプツィヒで哲学博士の学位取得後、かつて父が学んだベルリン大学で学業を続行し、リュッケルトにペルシア語を師事した。リュッケルトと父ミュラーは同時期にイタリアを旅し、同地の詩形を基に互いに独自の手法を生み出した。リュッケルトはミュラー以上に作曲家の高い評価の陰に隠れていたが、近年ようやく研究が活発化している。このように詩人の再評価が相次ぐ潮流の中で、当書はミュラーをより深く理解し、作品を読み味わうために好個の書である。

『ヴィルヘルム・ミュラー読本―「冬の旅」だけの詩人ではなかった』（2021 年）
松下たえ子著
未知谷　本体価格 3000 円